岩手大学教育学部研究年報　第40巻第1号（1980.10）61～75

家計記録よりみた昭和戦前期における農家の消費構造

―― 東北地方における自作貧農層の事例として ――

後　藤　和　子*

（1980年6月28日受理）

緒　言

家計とは生活の数字的な表現であり，生活の一側面にすぎない。しかし個々の家庭によって公けにする意図がなく記録された家計簿は，家政および家庭生活を知る手がかりともなるものである。さらに長期にわたる記録の場合は，家庭生活の歴史の一側面を示すものである。こうした捉え方にたって従来から家計簿を費目配分構造の分析資料としてとりあげた家庭経済学の研究[1]，更に発展させて消費行動全体および背後にある生活のしくみを総合的に捉えることを志した研究[2]等が家政学者によってなされてきている。

これらの対象家庭は都市の中流以上，農家の場合は地主または富農層に属する特殊な事例であって，大多数を占める一般庶民の家庭，農民の例は殆んどみられない。思うに，富農は家父長的な宰領の下に家政の一括管理が行なわれ，計画的な運営によって家運の存続と発展に専念する一貫した信念なり意志を持つ人物が少なからず実在していたことと思われる。しかし家計簿や日記等を継続的に記録した人はごく限られた人々であったため，研究者の立場からは資料を探すこと自体たいへん困難である。一般農家の場合は公的機関（簿記による全国的調査1921年から実施，農家経済調査は現在農林省統計調査部で実施されている）による強制的な依頼によって記録される場合をのぞき自発的に記録しようとする人はごくまれであると思える。まして戦前地主制度の下で大多数の農家が貧しい生活を強いられていた当時自家の経営記録を残そうという意志を持つ農民は珍らしい存在であった。そうした事情から戦前における農民の家計記録の類は見出すことが困難である。

今回たまたま昭和10年前後に秋田県男鹿寒風山麓に住む農民が記録した金銭出納表と日誌を見出した。本研究はこれにより，中農層以下に属する開拓農民の家計を事例とした家計分析である。これによって戦前における貧農の生活の実態や経営のしくみを家計の面から捉えようとするものである。

戦前においては富農は少数の限られた層であり，その生活水準は一般農家に比較してかなり高かったことはこれまでの研究[3]によって知られる。しかし農民層全体を対象として考えた場合，富農層のケースは特殊な事例である。大多数を占める小農の事例は生活に追われる日常の

---

*　岩手大学教育学部

1)　宮下美智子：明治―昭和期における一地主の家計　大阪学芸大学紀要　1957　6号
　　横山光子：同一対象の家計における消費の歴史的変化　杉野女子大学紀要　1975　12号
　　拙稿：家計構造に関する事例研究　―有業人員1人世帯と2人世帯の場合―　岩手大学研究年報　32巻　1972

2)　家政学会総合研究会生活史班：家庭経営の変動に関する生活史的研究　第三報　1979

3)　前掲 1)，2)，

中で記録として残されたものは極めて少ない。その意味で本研究は数少ない資料として貴重なものといわざるをえない。その分析を通して貧農の生活の実態を知ることができる。

Ⅰ　研究資料および研究対象

1　資料は「男鹿寒風山麓農民日録[4]」である。その中の金銭出納を記録した「収入・支出表」を中心に分析した。この記録は寒風山の山麓に居住し開拓農として激しい日毎の労働によって細い煙を立てていたO氏が，渋沢敬三氏の要請によって，男鹿における日々の具体的な生活がいかなるものかを知らせるために書いた農業生活日記である。期間は昭和10年3月13日から昭和11年3月12日まで1年間だけであるが1日も欠かさず記録している。日記には収入・支出，労働役割，作業の順序や労働技術をはじめ毎日の献立を記した食事表，品物の入手経路等が克明に記載されている。昭和初期の農民の記録として実に貴重であると編者が述べている。

研究方法は

(1)　収入および支出を費目別に再分類し整理集計して収支の実態を把握する。

(2)　家計構造とくに家計費の配分構造を検討するとともに，消費財の購入を通してO家の消費構造を総合的に捉えようとする。

(3)　貧農O家の家計を，富農K家の家計との比較によって，両家の経済力の差異が，家計費配分構造にどう反映しているのか，また家計費の各費目にどんな具体的な差があるのかを知ろうとした。富農K家は手近かに資料がありすでに分析研究[5]されてその年度のことがはっきり分っているという理由によって比較対象のケースとして選んだのである。同じ秋田県内にある富農であればさらによかったが，現在時点では資料の入手が不可能であった。

2　研究対象の概要

男鹿半島は秋田県の日本海岸に西に向って突出した半島であり，八郎潟をかかえこんだ形となっている。西に真山，東に寒風山がなだらかな丘状をなしている。その東麓には江戸時代に新しく開けた村がある。村の生立の記録によるとO家のある富永部落は寒風山の東南方に連なる村であり，年代は不明であるが脇本部落から吉田家を名乗る一家が移住してきて開拓によって開かれた部落であるといわれる。O氏は農家の三男であったから一家をかまえるために26歳の時分家し，昭和5年寒風山の山かげに開墾小舎（2間半×2間）を建て，2人の子供を育てながら夫婦で急傾斜の山畑を耕し蔬菜園芸を中心とする農業経営に日夜懸命に励む貧農の1人であった。全く水田を持たない開拓農民として裸一貫から出発したのである。

前掲の常民生活資料の編集者の記録によればO氏は少年の頃から向学心が強く勤勉な人物であった。小学校卒業後村の夜間補習学校本科5年を経て研究科2年を大正14年に卒業している。その間大日本模範中学講義録をとって自ら学び，18歳頃何かひとつの事を一貫して続けようとの強い意志の下に日誌を書きはじめた。19歳の時「あおぞら」という雑誌を知り，入会を契機に編集者大西氏と文通するようになった。氏の進めによって寒風山麓に生きてきた人々の生活をつぶさに記録した手記も残している。また20歳頃社会思想研究の講習会に参加するため

4)　有賀喜左衛門他5名：日本常民生活資料叢書　第9巻　東北篇2　日本常民研究所　1972

5)　拙稿　K家・家計記録の生活史的研究　そのⅠ　―所得構造を中心として―　岩手大学教育学部研究年報　第38　1978

同　上　そのⅡ　―消費構造を中心として―　〃　第39　1979

上京したり，富士山麓にある農村青年共働学校に入学している。こうした機会を通してO氏は多くの有識者，思想家，文化人，各地の青年にめぐりあい，それによって大いに啓発されたことは疑いない。O氏は青年時代の種々の生活体験を通して自らの農業者としての展望をもち寒風山麓に入った。氏がここで「新しい農業」を営む計画を立てたのも，ひとつには農村青年共働学校で得た体験が大きく原因していると述べられている。

家計分析の対象時期である昭和10年は入植後5年目であった。蔬菜栽培がある程度軌道にのりつつあったものの百姓仕事に日夜精魂を傾けた生活はきびしいものであった。日記に「1分を争うて働かねば最少限度の生活さえもできないようになっている百姓であった私共は良く働いた。幼い2人の子供を叱るように言いふくめて家の中に残し外から錠をかけておき妻と2人で畑仕事に励んだ。」と当時のことを記述している。こうした生活の中で夜おそくその日の記録をする。また冬の幾分暇な時間を利用し三分芯のランプの下で冷えて自由を失う手を息をふきかけ温めながら書き綴った日録である。氏は単に労働に専心するだけの農民ではなく，記帳と計画的農業経営の実践者であり，農業技術の研究心にもすぐれた篤農家でもあった。日記によると温床栽培や畑作経営の見学に度々他村からおとずれていることでも理解できる。

他方富農の例としてあげたK家についてはすでに詳述[6]しているが，ここで略記することにする。K家は隣県山形県にある一農家であり，明治初年から家計記録を継続しそれを残している。明治末年には村でも有数の土地所有者になり戦前は米作を主体に，養蚕，製紙の副業をもつ中農層の自作農家であった。昭和10年当時のK家は家族人数7名（K氏夫婦・父夫婦・長男夫婦・孫）であったが，実際の労働力は長男夫婦とK氏の妻の3人であった。そのため田は貸付け小作米を得る地主的側面をもち，養蚕を中心とする畑耕作によって自作経営が維持され，いわば大正末期以降家計は衰退に向っていた。

次ぎに昭和10年とはどんな時代だったか，当時の社会経済的背景について述べる。昭和6年（1931）の金輸出再禁止から昭和11年の2.26事件の前後まで日本は恐慌にあえぐ海外をしりめに，昭和5～6年の不況から脱出しめざましい発展をとげた時期である。不況脱出の契機は財政支出の拡大と輸出の増大によるものであった。今日でも戦前と戦後とを数量的に比較しようとするとき昭和9～11年平均を基準として比較が行われるが，それも戦前における経済活動がピークに達した時点であり，だれもが「戦前」の代表的な時期として回想する時代であった[7]。しかし農村の景気は，昭和恐慌のなかでどん底に落ちこんでいた。とくに東北では不況による米価の下落だけでなく，昭和8年の未曾有の豊作が米価を暴落させ，翌9年には冷害による大凶作が農民を苦しめる等概して不振であった。当時農業経営改善対策として全国的に農山漁村経済更生運動が展開され有畜農業の奨励，「自力更生」を旗印に農民の更生意識の喚起による救農対策が行われた。しかし期待する程の成果はなく，その後も慢性不況の様想を呈していたのである。

Ⅱ　結果と考察

1　O家の所得

昭和10年度における収支状況を分類集計した結果が第1表である。現金収入についてみると主な収入源は蔬菜栽培によるもので，畑作収入がいわば唯一の収入ともいえる。年間の作物売

6)　前掲 5) と同じ
7)　有沢広己：昭和経済史　日本経済新聞社　1977　p.108

上げを示した第2表によってみると，春5・6月は野菜苗の販売，7・8月は季節野菜の売上げが最も多く年間販売額の約4分の1に当る50円～55円の収入をあげている。12月から2月までは秋の貯蔵野菜を雪から掘りだし妻が時々市場に売りに出たことが日誌によって知られる。

第1表 所得の構成及び家計の実態

		O 家	農家経済調査全国農家1戸当り *	K 家
		円	円	円
農業現金収益	作物収入 稲作		251.57	1,148.39
	作物収入 畑作	188.75		20.30
	作物収入 その他		186.15	
	養蚕		112.16	327.89
	養畜	1.35	64.38	
	製紙			302.20
	農業雑収入	2.85	5.28	61,35
計		192.95	619.54	1,860.13
農業経営費	種子・苗木	14.76		0.36
	肥料・飼料	40.65	152.54	160.47
	雇用労賃			227.42
	機械・器具	1.60	11.29	73.82
	その他	4.85	63.93	68.02
計		61.86	227.76	530.09
農業所得		131.09	391.78	1,330.04
農外収入	勤労収入	6.32		
	農外事業収入		68.43	
	地代・配当・利子		150.41	155.08
	その他	0.95		
計		7.27	218.84	155.08
農外支出	負債利子		9.29	
	事業支出		11.20	
	その他		28.60	
計			49.09	
農外所得		7.27	169.75	155.08
現金所得総額		138.36	561.53	1,485.12
租税公課諸負担		0.76	58.79	354.98
可処分所得		137.60	502.74	1,130.14
現金家計費		171.26	365.08	655.35
差引		−33.66	137.66	474.79

註 農林省『農家経済調査報告』による（現金収支のみ）

第2表 作物の年間売上高

	種類	金額		種類	金額
		円			円
1月	葱 149把	2.90	2月	玉菜 6貫300匁	1.23
	ごぼう 11貫	2.20			
	玉菜 5貫400匁	1.05			
		6.15			1.23
5月	トマト苗 190本	3.27	6月	豌豆	3.14
	茄子苗 50本	0.45		茄子苗	0.40
	里芋種	2.00		大根	5.04
		5.72			8.58
7月	玉菜 138貫600匁	27.16	8月	かぼちゃ 50コ	3.35
	豌豆	0.28		すいか 20コ	4.05
	大根 300本	3.15		玉菜 63貫900匁	10.11
	茄子 840コ	12.98		茄子 3,587コ	24.80
	きうり 400本	4.33		きうり 64本	0.28
	トマト 5貫100匁	2.70		トマト 183コ	12.72
		50.60			55.31
9月	かぼちゃ2コ800匁	0.10	10月	葱 6把	0.10
	すいか 37貫	5.02		玉菜 8貫800匁	1.40
	玉菜 5貫100匁	0.95		白菜 4貫300匁	0.60
	大根	0.25		大根 41本	0.72
	茄子 2,414コ	11.85		カブ 4コ	0.10
	トマト20コ350匁	0.07		茄子 648コ	3.40
				里芋 83升	8.35
		18.24			14.67
11月	葱 24把	0.40	12月	葱 233把	4.40
	玉菜 6貫	1.04		ごぼう 7貫500匁	1.55
	白菜 109貫	11.06		玉菜 7貫	1.17
	大根 25本	0.30			
	カブ 16コ	0.33			
	里芋 57升5合	6.00			
	長芋 6貫100匁	2.00			
		21.13			7.12
				合計	円 188.75

冬季は売上げ収入が低下を示しているが，季節に影響される畑作物の収穫量の多少が端的に収入にあらわれていると云えよう。O氏はこの地方では先駆的な温床育苗の技術を取り入れていた。春3月雪どけを待って育苗を開始し，積雪する1月頃まで約700坪の畑を夫婦で野菜作りに励んだ。それによって得られた収入は年に182.98円である。過去5年間の畑作物売上実数の記録によると昭和5年は170.96円で昭和10年についで売上げが多くなっているが，凶作の年6年は105.37円，7・8年は130円代と売上げが減少している。昭和10年は過去5年間で最高の収入をあげている。

作物収入以外の，4.2円は兎の売却，皮のなめし加工賃等である。野菜くず等の飼料が自給できたことから，蔬菜作りのかたわら兎を飼育する一方，毛皮の鞣法をもひとつの農業として是非知っておかねばならぬと，なめし技術の講習を受け，兎皮を加工して販売したり，依託を受けて加工賃を得ている。また秋仕事が終了し暇のある12月は，帰郷した北海道方面出稼人夫らと共に土方労働にもでている。

日誌によると，3月にはいると温床踏込準備がはじまる。丈余の雪の自然にとけるのを待つことが出来ず，除雪に汗を流して温床作りを始める。春から冬までは3時半に起床して，午前7時頃までに午前の予定の仕事をおえ朝食をとる。その後もゆっくり休息する間もなく終日作業をするという生活であった。自家の畑作業のない日は本家に行き年雇いの者と共に田植，稲刈を始め，種々の農作業を手伝い，その合間には本家の竹やわらで，背負いかご，わらぐつ，ふご，すだれ（温床風よけ用）等を手作りしている。また農繁期には他家に日雇労働に出ており，妻と共に寸暇を惜しむ労働によって得られる現金収入総額は年に200.22円である。この収入の低さは第1表に示す全国農家1戸当平均農業現金収入額の約30％にしか達していない。さらにK家の収入2015.21円と比較すると著しく低い水準であることがわかる。

農業経営費は61.86円で現金総収入のほぼ3分の1に当たる。その中65％強は肥料代であり，過燐酸，大豆粕，魚粕，油粕が購入されている。購入月は2，3月に集中していることから春先の播種期においで肥料を充分投与した配慮をよみとることが出来る。農薬も若干使われている。肥料についで野菜種が多く買われている。種は遠方から為替送金によって求めているが，これも品種改良を考慮したものと思われる。1月に購入し温床育で促成栽培を行ない自家用の残り苗は他へ売っている。稲わらも自給できなかったから時々購入され，または本家からもらっている。わらは温床用であるが，当時当局の副業奨励のブームによってわら工品が盛んになり，他村からわら買いがはいり品不足によりわらの値上りをきたしたことが記録にみられ，1日いっぱい走り回って100把しか得られなかったとわらを入手する苦労を日誌に書いている。農機具類は全く購入されていない。防虫消毒用に噴霧器の修理とゴムホースの支出があるだけである。畑打ちの作業は3月下旬に行なわれ馬耕にかけている。馬は本家から借りており，その代償に本家の仕事を手伝いに行ったことのようであるが，農作業の面で本家と密接な交流があったことが日誌からよみとられる。

農業投資額においてもO家はK家の約8分の1にしか当らず，K家の雇用労賃を除外しても4分の1以下の支出である。O家は限られた生産力から大巾な増収が期待できず，絶対的に少ない収入の中では作物栽培に不可欠な肥料投資に止めざるを得なかったということであろう。農業経営費を差引いた年間農業所得は131.09円である。これに日雇労賃6.32円，ハーモニカ，古鉄売却等若干の農外収入を加えるとO家の現金所得総額は138.36円となっている。この所得額は第1表に示す全国農家世帯1戸当りの所得およびK家の所得と著しく大きな開きがあり比

較すること自体無理な試みに思える。それは生活基盤自体に大きな差があり，経営規模に規定されるものといえる。K家は水稲耕作の外に副業を持ち，加えて金融資本による農外収入をもあわせもつまことに経済的基盤の大きい農家であり，その所得額はO家の約10倍という雲泥のちがいである。

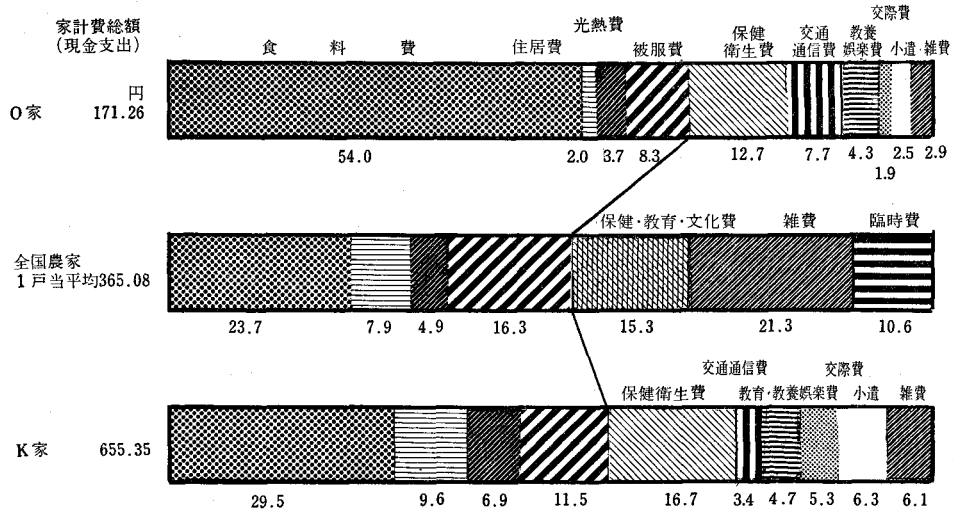
2　家計費配分構造

O家の家計費は第1表に示すように年間171.26円である。月平均にするとほぼ15円に満たない金額であるが，月によって少い時は3.6円から多い時は32円までかなりの違いがある。毎月やや一定した収入の中で賄われる給料生活者とは異なる支出傾向を示すものといえる。家計費は消費水準をはかるひとつの指標ともなるが，所得の低さ，家計支出の少なさにおいて貧農の典型とみることができる。

第1表に示すK家の家計費655.35円の約4分の1にしか当らない。いかに低水準の生活においこまれているかを物語る。しかし家族人員が異なるので，単純に1人当りの支出額をみた場合O家は約43円，K家は94円となりO家はほぼ2分の1に当るとみられる。また全国農家1戸当り平均と比較してもO家が少なく約2分の1にしか至っていない。家計費の費目別消費支出の詳細については後に述べるが，両家の経済力の差を反映している費目は住居費，交際費，家計光熱費，被服費等である。

O家の家計費の配分構造を第1図によってみると，食料費が最も高比率を占め54%を示している。被服費，光熱費，住居費を含む，いわゆる基礎生活費は68%と高い比率を占め，K家の57.5%に比べると，それら各費目の支出額からみても，生活水準の低さを端的に示す配分構造とも云える。

その他の諸費の中では保健衛生費が12.7%と高比率を示し，食料資に次いで多い。この支出は平常の月はごく少い支出であるが，長女の入院という特殊事情によって，この年は特に比率が高められたものである。その他の費目では交通通信費（7.7%），教養娯楽費(4.3%）が比較的



第1図　家計費配分構造（1935年）

第3表　家計費費目別支出内訳

支出項目	O家 (A) 円	K家 (B) 円	全国農家1戸当平均 円	(A)/(B) %
食料費	92.41	193.16	86.62	47.8
主食	56.98	1.43		
米・麦	54.77			
うどん	2.16	0.20		
そば・打賃		1.23		
その他	0.05			
副食	13.48	25.26		53.4
さかな	10.65	18.51		
野菜		1.19		
豆製品	1.18	1.31		
海藻	0.30	1.78		
卵類	0.20	2.22		
その他	1.15	0.25		
調味料	13.65	11.97		
塩	2.95	4.40		
みそ大豆	3.50			
さとう	3.09	3.14		
しょうゆ	2.79	0.15		
酢		0.97		
その他	1.32	3.31		
嗜好品	8.30	26.03		31.9
かし	6.20	3.15		
果物	1.50	3.27		
茶	0.05	1.16		
酒	0.20	17.90		
その他	0.35	0.55		
〔商店払〕		〔128.47〕		
住居費	3.36	63.27	28.86	5.3
家屋修繕		49.40		
厨房・什器	1.75	2.64		
電気器具	0.21	0.70		
その他		7.40		
修理	1.40	3.13		
家計光熱費	6.38	45.47	17.85	14.0
石油	1.98	5.60		
木炭	3.50	12.30		
電気料		22.27		
その他		5.30		

支出項目	O家 (A) 円	K家 (B) 円	全国農家1戸当平均 円	(A)/(B) %
被服費	14.27	75.38	59.39	18.9
着物・布	5.24	27.93		
縫賃		1.38		
洋服		7.00		
下着	1.52	10.95		
履物・服飾	6.21	14.62		
寝具・綿	1.30	2.20		
〔商店払〕		〔11.30〕		
保健衛生費	21.81	109.57		20.0
医薬	0.85	23.30		
医療	19.51	81.60		
理容	1.45	2.62		
その他		2.05		
交通通信費	13.15	22.24		59.0
切手・封筒・葉書	4.97	0.43		
汽車賃	5.51	11.96		
郵送料	2.67	0.45		
自転車修理		8.50		
教育費	—	13.10		
学費		11.60		
学用品		1.50	保健・教育・文化	
教養娯楽費	7.41	17.52	55.94	42.3
雑誌	5.05	0.18		
文具	1.66	4.50		
信仰費		5.95		
趣味・娯楽	0.70	6.89	雑費	
交際費	3.20	34.65	77.63	9.2
祝	0.50	14.40		
土産	1.00	2.20		
見舞	0.20	7.73		
悔	1.50	12.32		
雑費	9.27	80.99		11.4
寄附		19.33		
小遣	3.89	41.35		
タバコ	0.38			
家事使用人		12.37		
その他	5.00	7.94		
臨時費	—	—	38.79	
家計費	171.26	655.35	365.08	26.1

高い比率を示している。

つぎにO家の家計費配分構造がK家と比べてどのような差異を示すかをみよう。基礎生活費の比率はK家よりほぼ10%高く，生活上基本的に必要とされる支出は所得の低い家庭ほど比率が高いことを端的に示している。特に食料自給基盤の差異が食料費に影響を及ぼしている。多くの農家が自給をたてまえとしている主食についてもそれを購入している。このことが食料費の比率を高め，54%となっているが，これはK家の約2倍にあたる。また食料費以外の基礎生活費の各費目構成比においては，どの費目もO家は低率を示しているが，支出額を比較してもかなり低水準であることが第3表によってあきらかである。

その他の諸費のうちで保健衛生費が高率であることは両家に共通した配分構造の特徴である。K家では病人が多く医療費が家計に多大な影響を与えたのであるが，この事についてはすでに詳述[8]している。O家にも前述のように入院者があった。病人の発生は必らず多くの医療支出を伴ない，家計にとって大きな負担であることがわかる。その他の費目で特徴的なことは，O家は交通通信費・教養娯楽費がそれぞれ7.7%，4.3%とやや比率が高く，K家は部落内における家柄から交際費が5.3%とやや高比率を示している。

以上家計費の配分構造を概観したが，つぎに生活財購入の実態を通して消費生活構造を検討する。

3　消費生活の展開

(1)　食料費からみた食生活

村の生活記録によると，O家のある富永部落は古くから稲作面積が少なく，1年分の飯米が自給できる農家は数軒しかなかったといわれる。O家の購入食料の主なものは主食の米・麦であり，食料費の62%が主食によって占められている。このことは水田が全くなく米の自給が不可能であったことを物語る。日誌によると入植初年度の昭和5年には本家から米をもらっているが6年以降は購入している。10・11月の収穫期に3俵と端境期の8・9月に3斗の米が購入されている。夫婦と子供，親子4人の1年間の飯米には到底不足する量である。春から秋の間は働き先の本家で食事をする機会が多く，また他家で働いた手間米をもって1年間食いつないだことが日誌からよみとられる。カテ飯の麦も購入され，主食費の大部分が米麦費で54.42円の支出である。他に毎月うどんが買われている。これは米を食いのばすための補食と考えられる。第3表に示されるように食料費中支出額においてK家と最も格差のあるのは主食費である。O家は主食の購入依存を余儀なくされた結果，主食費がK家より大巾に上回っている。

副食費は主食費の4分の1にも満たない。そのうち野菜類は畑作農家であるから唯一の自給食料であり全く購入されていない。副食費13.48円のうち大部分の10.65円は魚類の購入に当てられている。その種類は鯨，いわし，塩ます，塩にしん等に限られ，購入頻度は月に2～3回位である。肉類は全く買われていない。しかし日誌によって飼育していた兎を時々食べたり，他家からのもらいもののとり肉，馬肉等が時々食されていることが知られる。その他とうふ，とうふかす，こんにゃくは比較的購入頻度が高い。海藻，佃煮の購入が1度位みられる。概して購入食品の種類は数種に限られている。副食費はもとよりK家に比較して少いが食料費中では最も格差が小さく，1人当りの支出額に換算してみるとほぼ同額（O家3.4円，K家3.6円）を示している。このことからO家は低い所得水準にありながら，基本的な食生活については充分

8)　拙稿　K家・家計記録の生活史的研究 そのⅡ —消費構造を中心として— 岩手大学教育学部研究年報　第39 1979

配慮し動物性蛋白の摂取を心がけ，自家製野菜を食し，安価で満腹感を与えるような食品を購入する等労働に耐える体力の保持に努めたことが推察される。1年間克明に記録した食事表から6月の献立，一週間分を抜粋し第4表に記す。これからわかるように主食はつぶし麦を半分以上混入した麦飯を常食とし，朝はみそ汁に漬物，昼は塩魚と漬物，夕食には大体昼と同じというように全く千篇一律で，典形的な古い食事型態のパターンである。

1年間の食事表を概観すると，野菜は野生の草木を多く食している。すなわち片栗草，アザミ，わらび，ぜんまい，こごみ，ふき，たけのこ，タラの芽，百合根等を食べている。大根，茄子等の栽培作物の自家消費は最小限にとどめていることが知られる。また秋はきのこ類，八郎潟からとれる鯉，えび，ふな等の湖魚，海草類の購入は記載されていないがアラメ，ワカメ，アヲサ，クロモ等を食べている。これらの食品は買ったものではなく，本家又は妻の生家，兄弟から分けてもらっている。なお随所に目につくのは「本家にて食事」，「本家にて小昼」又は「夕食」とあり，その献立は，大抵さかなに煮付け，時には酒もつき平素の食事より御馳走が多い。また労働日の間食にはしだ餅，ネレケ餅（シダやソバを石臼で引き粉にし，湯でねってはたはたのショッツルをつけて食す），アンプラ餅（馬鈴薯団子を南瓜や小豆に入れ塩味で食す）等を食べているが，まことに素朴な食物をとっていたことがわかる。

調味料は13.65円支出され，副食費より0.17円多い。この家の食事表からみるとみだくさんのみそ汁は主菜ともなっており，労働の活力源として欠くことのできないものであった。村では大抵大人1人当り豆1斗の見積りで味噌を自家製にしたという記録がある。日誌によると5月18日に本家の釜をかり大豆1斗で7合あい（大豆1斗に麹7升，塩7升）のみそを作っている。昔はその年仕込んだみそは食べず，3年たって食べたが，この頃は財産家を除いて大抵その年に作ったみそを食べねばならぬ程貧乏になったと記している。

しょうゆは毎月はかり買いがされている。原料の大豆の自給が充分でなかったので，自家製はみそに限ったものと思える。しょうゆの支出は2.8円であるが，記録による1升0.3円の価格から換算して年に約9升，1か月当り約8合の消費になり，1日1人当り約10～15ccに当る。現在食事調査からみるしょうゆの消費料は1人30cc位である。現在の量と比較すると決して多い量とはいえない。塩分摂取はみそ汁と漬物によって充分満たされていたと考えられる。まれに食べる煮付けやうどんの汁に用いられる程度と思われる。第3表でわかるように調味料の支出は主食費や副食費ほどK家との階層差は認められない。むしろ他の食費と異なりO家の支出の方が若干多い。それは第3表にみられるようにみそ大豆の購入によるものである。K家は自給大豆を用いてみそ，しょうゆとも自家製であったから塩の購入はO家より著しく多くO家の2倍支出されている。酢や油の支出もごく少額に止まっていることはO家の食事の内容が変化の少ない料理であることを示しているといえる。

さとうは黒砂糖の他に白糖，ザラメもよく使われ，殆んど毎月購入されている。支出は年に3.09円である。この支出額はK家のさとうの支出とほぼ同じであり，さとうの消費は調味料全体の支出からみて多く，みそ大豆の支出についで多い支出である。日誌から読みとると，そばや米粉を使って作った団子や餅をよく食べているが，その時の味付けに使ったものと思われる。

次に嗜好品であるが，これは食料費のうち最もK家との階層差の大きい費目である。8.3円の支出はK家の32%にしか当らない。その中で菓子類の購入頻度が高いことが目立つ。お菓子は月に5～6回，アメは月に7～8回買われており，嗜好品総額の75%を占めている。又6.2

第4表　食　　事　　表

月　日	朝	昼	夕	備　　考
6．20	ふきのみそ汁 たくあん，梅漬	塩にしん，たくあん	朝と同じ	
21	ふきのみそ汁 たくあん，ゴマみそ	生ソバ茎 塩にしん，たくあん	筍とクロモのみそ汁 塩にしん，たくあん 大根おろし	此頃1日に4人分の飯は米9合 つぶし麦4合の割
22	たけのこ，ふき，ツルモのみそ汁 たくあん，大根おろし	ソバ茎の塩漬 イシヤジャの塩辛* 大根おろし	筍，ふき，豌豆，コナゴ クロモのみそ汁 イシヤジャの塩辛 大根おろし，ソバ茎	* 八郎湖産の小魚 1升 塩 1升 割合 桶に入れて漬けておき数か月後に食す
23	たけのこ，ツルモのみそ汁 たくあん，ソバの茎	塩にしん，たくあん ソバ茎	筍，クロモのみそ汁 他は昼と同じ	
24	筍のみそ汁 大根おろし，たくあん ソバ茎	塩にしん 他は朝と同じ	大根のみそ汁 塩にしん，たくあん	
25	筍のみそ汁 たくあん きうりのみそ漬	大根おろし，たくあん	コナゴ，筍，ツルモのみそ汁 塩にしん	間食　シタナミ（海の貝）
26	筍とクロモのみそ汁 たくあん	マグロと葱の煮付	大根のそそ汁 昼の魚の残り クロモのシイコ	

円の菓子の支出はK家の2倍になっている。煎茶の購入はただ1度0.05円支出されているのみで，お茶うけに菓子を食べたとも考えられない。当時は幼い子供を留守番にして畑仕事に日夜励まざるを得なかったと前に述べたが，子供をなだめるためにおやつに買い与えたものであろうか。しかし記録には「家に残した2人の子供に気のきいた玩具も，またまずい菓子の1つも買ってやれない私共であった」とあり詳細は不明である。

果物はリンゴ，ナシ，ミカン等が買われ，支出は僅少であるから，おそらく子供のおやつと考えられる。食事表の間食に果物では柿ぐらいしかみられないことから家族の嗜好品摂取は非常に少ないことが知られる。

酒は2月の旧正月に1度だけしか買われていない。田植え，稲刈りの季節に本家又は他家で飲む機会のある時以外日常家では飲酒の習慣は全くないし，又その余裕も経済的になかったと思える。嗜好品についてK家との差は飲酒と喫茶に大きくあらわれている。K家は家族に飲酒家がおり，また村つきあいも多く，茶菓子は接客用に限らず家族も日常茶を飲んでいた。それを可能にした経済的豊かさがあったからである。

以上の如くO家の食料費からみられる食生活は，自給は野菜のみで，主食の穀類をはじめ，みそ，しょうゆの原料大豆も購入しなければならなかった。従ってO家では日常生活に不可欠な主食の支出に重点がおかれ，ついで塩やしょうゆ等の基本的な調味料が購入されたと考えられる。副食費は生理的限界ぎりぎりに節減されている。購入食品の種類をみても，その多様性に欠け，蛋白源は専らさかなに依存し，安価な塩蔵加工品を多く求めている。嗜好品の摂取も子供に与える菓子，果物等最少限にとどめ，支出の節減をはかっていることが推察される。O

家の食生活は数字上からみる限りきわめて貧しい。しかし栄養摂取は最低限満たされていたと思われる。いわばO家の自給食料費の低さが購入食料費の比率を高めたのであるが，食事表を通してみた食生活は購入されていない食品を種々摂取しており，労働力再生産に要する必要な栄養は確保されていたことは見逃がせない。

(2)　住居費からみた住生活

住居費はK家との階層差を最も顕著に示している費目のひとつである。第3表からわかるように特に家屋修繕費に大きな差が認められる。広大な屋敷を構え，屋根葺きや家屋の修繕を随時行なっていたK家とは当然異なる。O家は入植開墾農家であり，山合いの沢に建てられた極く粗末な山小屋風なものであった。家がせまくて置くところがないと，生家においてきた妻のタンスを12月に運び入れたことが日誌にみえるが，家の状態が好転したわけではなく，何か事情があったのだろう。また旧歴12月30日に正月を迎える準備に屋内掃除をし，天井のすす払いと，むしろのごみたたきをし，敷きなおしていることから想像すると板床にむしろをしいた生活であったと思われる。住居費としては目新しい支出は何ひとつなく，杓子，たわし，バケツ等消耗品的な厨房用品，又は時計とはかりの修理費にすぎない。

照明はランプに依り，石油は毎月4～5合ずつ小口買いで求めている。したがって光熱費はランプ用の石油と木炭の支出，他にランプホヤ・ランプ芯の補充等によるものである。電気を照明に使用していたK家と異なり，支出額も少なく，K家の14%にしか至っていない。冬はいろりに，分配された共有地から運んだそだや割木を燃やし，木炭が暖房用にいくらか求められている。1年にわずか2俵（18貫）3.5円の支出にとどまっている。これからみても暖房も決して充分ではなく，きびしい男鹿の冬を乏しい暖房に耐えての生活であったと思われる。O氏の手記の中に「……蛍の先のような三分心のランプの下で，インキをペンにつけるとインキは見るまに凍り，手も又冷えて自由を失い，ために絶えず自分の口から出る息を吹きかけて幾分でもインキを温め，又割木を焚くその煙りにむせび乍らどうやら書いた。又私の書く手が凍れば温まるまで時に代書してくれた妻……」とあり，労働のきびしさの中にあって，貧しさに耐え寒さに耐える生活の中で烈々たる志をもって生きようとする姿が切実に感じられるようである。

(3)　被服費からみた衣生活

被服費においてもK家との差が大きく認められる。O家は14.27円で家計費の8.3%にすぎないがK家は75.38円で16.3%を占めO家の5.3倍も消費している。被服費を構成する各費目を検討すると，第1に和服地，布類の購入額が著しく異なっている（第3表参照）。K家は成人女子が3人おり，K家の家風が容儀に関心が高く衣類や身回り品の購入が多い家計であった。O家の衣類の購入月は，正月，旧歴盆の8月，冬を迎える11月が主で，家族の足袋，木綿地，子供の下駄やゆかた，ゴム長靴，衿巻等概して子供用が多い。シャツや着物は古着が購入されている。黒木綿，木綿地は働き着として用いたものと思われる。この村の労働着はチヅレコ（黒木綿を黒糸で2～3分おきに刺したもの）または，カナガラコ，ハンチャコとも呼ばれたものを着た。農作業の暇な時や雨天の日は妻針仕事と日誌によく目につく。家族の平常着やつくろいは妻の手縫いであったと思える。またフトン作りも行われたことが，綿ほかし（綿打ちのこと）賃や綿を購入していることから知られる。多忙の中にあっても農閑期には衣類の管理にも意を用いていることが読みとられる。

(4)　その他の諸費とその生活

衛生面についてみると，先にも述べた如く保健衛生費は21.81円支出され食料費に次いで多

い支出をなしている。内容についてみると理髪代・歯みがき・石鹸・カミ油等の衛生用品および整容上の支出が定期的にみられる。また薬はアスピリン，痔薬が1度買われている程度であるから，毎月0.1～0.2円程の支出に止まっている。ところが9月に6歳になる長女が秋田の病院に入院したことによって19.51円の入院費が臨時的にでたために，保健衛生費の比率が高められた。従ってこの年は例外的な年とも考えられよう。1週間で退院でき高額医療費の負担は幸いにも9月だけの短期間ですんだとはいえ，低所得の家庭の場合，1度病人がでたら家計は深刻な影響を受けることは明白である。

交通通信費は第1図の配分構造に示されているようにK家より比率が高く，教養娯楽費はほぼ同率である。従って支出額についても第3表でみられるようにK家との格差は他の費目に比較すれば小さい。交通通信費は切手，葉書代，郵送料あるいは汽車賃等である。日誌によるとO氏は肥料買い，苗買い，種苗交換会の見物等に時々秋田に出掛けている。その際の秋田行きの交通費であろう。また夜は原稿の再読と整理の記述もあり，東京の編集者に郵送したり，文通に要した費用と思える。

教養娯楽費は7.41円で家計費の4.3%を占める。主な支出は雑誌代，書名は不明であるが単価1.6円ないし2円の書籍，原稿用紙やインキ等の文具費である。その他には子供に玩具を土産に買っているのみで，支出面からは娯楽的な消費は何ひとつみられない。教養的色彩が濃厚である。晴耕雨読とでもいえようか，労働の合間に読書に親しみ，ものを書くというインテリ農民の姿の一端が日誌により伺われる。仕事の休み日は正月と盆に半日か1日に限られ，農閑期の1・2月は仕事以外に部落の民衆雄弁大会や青年団主催の講演会を聞きに行くことが唯一の休養であった。昭和初期からこの当時の民衆文化は活動写真，紙芝居，ラジオなどであった[9]。ラジオの本格的な放送が行われたのは大正14年であり，昭和6年にはラジオの受信契約者は100万をこえた。そしてこの年の9月満州事変のニュースが，史上最初の臨時ニュースとして放送され，その後ラジオは国民のもっとも手軽で身近な楽しみの源泉になるとともに，戦争と国民を結ぶ最大のきずなとなった。O家は昭和10年にまだラジオがはいっていない。K家においてさえラジオの聴取は昭和19年であるから，農村は文化的設備の導入がかなりおくれていたといえる。日誌によると明らかに娯楽と思われる事柄として，1月に信用組合と脇本出稼労働組合の共催による組合員慰安無料活動写真を見に行ったことが，ただ1度あっただけである。

最後に交際費についてみよう。地主農家の家計分析において，上層農家の交際費の性格については岡村氏が詳しく述べ[10]ている。またK家の例でも基礎生活費以外の「その他の諸費」のうち概して高い比率を示す費目である。農家家計の特色として一般に交際費の高率が家庭経営上の問題点とされてきている。O家の交際費は3.2円で家計費中最も少い支出額を示し，構成比はわずか1.9%にすぎない。K家は5.3%の比率を示しており貧農と富農の支出の格差が極めて大きくO家の交際費はK家の10分の1にも満たない。内容は妻の生家の結婚式に祝儀0.5円，友人の土産1.00円，病気見舞0.2円，村のつき合い費1.5円等である。ひとつひとつ支出をみると，すでに交際費として支出する単位が異なっていることを知る。例えば祝儀は1件当り0.5円に対しK家は1.00～2.00円の支出，見舞は1件当り0.1円に対してK家は0.5～1.2円の支出に

9)　家永三郎：日本の歴史 6　ほるぷ出版　1976　p.142
10)　日本家政学会・東北・東海道支部　家政学総合研究会生活史班：家庭経営の変動に関する生活史的研究　第Ⅱ報　1975　p.192

なっている。このように同じ地域内での比較とは云えないが所得水準特に家格の差が交際費の支出に大きく影響している。ともあれ，上農層は村つき合いが重視され交際費の負担が大きくなる傾向がみられる。所得の低いO家は，最低限の生活を支えるだけで精いっぱいの家計であったから，他家のちょっとした出来事にまで支出する余裕がなく，交際範囲がその意味では局限されていることを物語るものであり交際件数も少いのであろう。O家は交際費の節約を余儀なくされ必要最小限におさえたものと思われる。

以上消費生活全体を通じて感じられることは，少額の所得をもって一面では肉体の維持，ひいては労働力の再生産確保，他面においてある程度までの社会関係の維持をはからねばならなかった。収入支出の予定表，食事表，土地利用等いくら計画的に仕組まれた生活であろうと，どれ程精魂をかたむけて働いてもその生活は決して楽ではなく，日夜苦悩の生活を送っていたということができる。昭和10年には1年の収支決算で可処分所得137.0円，家計費171.26円，差引赤字33.66円を出しているのである。家族の入院というアクシデントが仮になかったとしても家計はマイナスを示している。

地主制下においてはひとり東北のみならず，全国の農民の大多数は，資本主義経済の波とうに巻きこまれ，程度の差こそあれ，O家と共通した生活状態であった。昭和8・9年頃岩手県山間部村落における一般的な農家について，農民の生活状態をつぶさに見聞した報告書[11]がある。11戸の農家を対象とした調査であるが，これらの農家は例外なく多少の水田を作り，しかも標高300～450米の高原の冷涼地帯に耕田が行われている。この中現金収入の上中下に当たるいくつかの例をとりあげ参考に収支の状況を第5表に示した。年代は2・3年前のずれがあり，経営条件の違いを無視し現金収支のみで端的な比較は無理であるが，O家は現金収入，支出，生活費からみて，この中の低いところとほぼ同じ水準であることが知られる。しかし負債償還が全くないこと，1人当り食料費が多いこと等から，O家の生活程度は大体岩手山間部農家の中位以上とほぼ同じ位と考えられる。農民の生活水準がどんなに低位なものであったかがこの報告書によってもよくわかる。

第5表　岩手県山間部農家の家計

1933

	対象農家	家族員数	現金収入	現金支出	支出内訳 肥料代	諸税	農具	飼料	負債償還	経営経費	生活費	食料購入額	家族1人当り食料費
		人	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円
上閉伊郡青笹村	A家	6	272	414	75	100	20	—	31	4	184	62.70	10.45
二戸郡浄法寺村	B〃	7	560	444	47	50	40	55	—	27	225	107.00	15.29
二戸郡荒沢村	C〃	8	230	259	7	55	3	—	30	—	164	52.30	7.79
二戸郡小鳥谷村	D〃	10	80	124	35	18	1	—	6	—	64	19.50	1.95
上閉伊郡上郷村	E〃	6	752	483	76	40	23	7	62	140	235	50.60	8.43
O　家		4	200.22	233.88	40.65	0.76	1.60	—	—	19.61	171.26	92.41	23.10

結　語

日本の歴史において農業は「農は国の基」ということばの通り，国の経済の主体であった。

11)　太田正治・都築重男・茂木和夫：北海道農民の視た凶作地　八雲新報社　1935

農村社会における人間の考え方や生き方は日本人の国民性に深い影響を及ぼしてきた。農民が農業をもって暮しをたて，国を支えているという自覚と自負は長い間ゆるぎないことと思われてきた。ところが第二次世界大戦後の高度経済成長を契機にして農業国から近代重化学工業国へと変貌したのである。これによって都市への人口流入は益々促進され，農村の過疎化を招いた。貿易の拡大は安い農産物の輸入を増大し，農村，農民の経済生活，社会生活は大きな変革をせまられた。数次にわたる農業政策の変更，農産物価格維持の政策にもかかわらず兼業農家は増大し，反面専業農家の激減をもたらした。この歴史的ともいえる農業の変化の中で，農業を中心とする戦前の農村および農民の生活実態を知ると同時に，地主制度の下で農民がいかに貧しい暮しを余儀なくされたかを，この研究を通して検討したわけである。

昭和戦前期に開拓農民として生きた東北の一自作貧農層O家の家計記録を分析し，家計構造を通して消費生活のしくみを捉えることを目的に考察してきた。その結果次のことが認められた。

(1)　O家の現金収入は，蔬菜経営による畑作収入が主体をなす。現金所得総額は全国農家1戸当平均の4分の1，富農K家の約10分の1という低さである。

(2)　現金家計費総額は全国農家1戸当平均支出額の2分の1，K家の4分の1に当り，収入の低さに応じて消費水準も当然低い。しかし所得の差異程に大きくない。これは生きるための最低限度の支出は収入額を越えても支弁されなければならないことを物語っている。

(3)　収支バランスは赤字をきたしている。家族の入院という突発的な出来事により多大の医療費を支出している。このアクシデントを除外しても家計はマイナスの結果をきたしている。

(4)　家計費の配分構造については，基礎生活費が68％を示し，そのうち飯米の購入依存が食料費の高率を招き54％を占める。生活水準の低さを端的に示す配分構造がみられた。

(5)　食生活は，自給は野菜のみ，主食の購入に重点がおかれ，購入食品の種類は多様性に欠け蛋白源は安価な塩蔵品を多く求め，嗜好品の摂取も少なくきわめて貧しい。しかし購入品以外の食品を多くとっていることが日誌から知られる。記録にはあらわれないこれらの食品によって最低必要な栄養は確保されていた。

(6)　配分構造の上で富農K家との階層的な差異は第一に住居費ついで交際費，光熱費，被服費にみられた。すなわち雨露をしのぐに足りる住居に住み，被服は平常労働着で通し容儀上最低の支出に止めている。ランプの生活に冬は寒さに耐え，村の共同体的な関係に規制される交際等も最少限に止め節約をはかっている。従って比率はK家と比較して著しく小さい。

(7)　家計費のなかで比率がK家より若干高いのは食料費以外では交通通信費であり，ほぼ同率を示す費目は教養娯楽費である。内容は農業経営の必要から秋田に出向いた折の交通費，記録原稿の郵送および文通の費用，雑誌，書籍代等である。記録からみる限り新聞購読，ラジオ聴取等の娯楽的な生活は全くされていない。読書が唯一の慰安であり，夜は記録に時を過ごすという農民としては珍らしい向学心に富む強い信念の持主であった。百姓に精魂を傾けつつ今日の窮乏をあくまでも農民自身の問題として，計画的な経営によって生活を築いて行こうとする熱意と意志を持つ精農の生き方であった。

(8)　富農層の農家は，世帯主の支配による一括管理が行なわれ，主婦は主に食生活のとりしきりの仕事が主であった例が多い。O氏は食事の仕度，味噌の仕込み，食料の管理等殆んどの生活経営について妻と2人でとりしきっている。また貧農の経済観念は「農業経営」と「家計」とは同一のものであるといういわば原始的な経済理念がみられた。

秋田県には近世のはじめ，開拓事業家，農業経営者として有名な渡部斧松がおり，明治には報徳主義者石川理紀之助がいる。氏は合理的な農業経営法をすすめ，村の建て直し，農村振興策に力をつくした。昭和10年当時秋田で開催されていた種苗交換会は石川老農が始めた運動で，秋田県の農民祭となっており，O氏もこれに参加している。氏はこうしたすぐれた農業先達者出身地の風土にはぐくまれ農民としての将来の展望をもちながら，計画的な生き方をしている。

また昭和10年当時農村は依然として窮乏の底にとりのこされ，農村経済は殆んど好転しなかった。この対策の手段として例えば，政府および地方自治体は，卒先して経済更生に活躍する精農型の中堅人物を推進力として農民の経済更生，負債整理をめざす農山漁村経済更生運動が展開されていた。こうした時代の要請にこたえた「勤倹力行」の生き方をしたものと思われる。ともあれ日録を終了した昭和12年志半ばにして郷里を離れ一家をあげて上京したのである。この研究によって日本が日中戦争に突入する前の一時期開拓農民として計画的な畑作経営にとりくんだきびしい貧農の生活を見ることができた。